



野球を通じた教育



中村 お二人の教育方針を教えてください。

小菅 「私が」とか、「監督が」ということではなくて、野球が全て教えてくれると思っています。仲間と一緒に野球をやって、野球の中で失敗して挫折する。それからリカバリーする。

そして、仲間と一緒に力を合わせて目標を達成する。その達成感とか充実感とか、野球が全て教えてくれると思っています。



持丸 子どもたちの教室での姿やグラウンドでの姿など、さまざまな角度で子どもを見守ることが丁寧な指導につながると思います。

「失敗は成功の基」と言いますが、失敗をすればするほど、上達も早いですね。失敗を怒らないというのは大事なことです。最も成長するのは、「何でもやってみる」こと。それが伸びる原点です。

中村 私も、市の職員に「どんどんチャレンジをしてほしい、新しいことに向かっていってほしい」と伝えていきます。また、叱ることがあっても、その後のフォローが必要ですね。逆に、フォローできない人は叱ってはいけないし、怒ってはいけないと考えています。

子どもたちと日頃、どんなコミュニケーションをとっていますか。

小菅 まず、部員のリーダーたちとよく話し合って、部員が今どういう状況なのかを確認しています。

また、観察することが大事だと思います。この選手は今、何を考えてるのか、悩んでいるのか、それとも生き生きしてるのかということを感じながら、タイミングを見て私たち大人が話しかけて、背中を押していきけるようなコミュニケーションをとっています。

持丸 私は基本的に話しません。特に、試合中は全然話さないですね。

小菅 持丸監督の場合は、子どもたちが自ら寄ってきて会話していますよね。

中村 持丸監督はコミュニケーションを取らないと言いつつ、一人一人をちゃんと見ているんでしょうね。

持丸 このコミュニケーションの取り方は、木内(※2)野球の一つです。あの方は人間の観察力・洞察力が素晴らしい。指導者同士の付き合いの中でいろいろ話していると、そういうことを強く言った人だなと感じています。

中村 木内さんを慕う持丸監督も、子どもたちをよく見ているんですね。

※2 **木内幸男氏(故人)**
取手市名誉市民。昭和32年に取手第二高等学校監督に就任して以来、野球を通じた青少年の育成に励んだ。また、昭和59年の取手第二高等学校の夏の甲子園全国優勝をはじめ、常総学院高等学校監督としても夏の甲子園全国優勝を果たすなど、多くの功績を残した。その観察力・洞察力を活かした戦術は「木内マジック」と称されることもある。

木内幸男氏
インタビュー動画



子どもとの接し方



中村 自分の元から巣立っていく子どもや、自分が預かっている間の子どもの接し方は。

持丸 子どもによって、どの職業や大学がいいのかなどを考えながら接していますね。部員には「それぞれが自分の生き方を見つけよう」と話をする人が多いです。

小菅 当たり前のことを当たり前にするような人に育ててほしいです。子どもの可能性には、ふたをしてはいけないという考えで接することが大事だと思います。

中村 学業や生活面での、両監督の子どもの接し方は。



持丸 高校野球というんだから、野球人である前に高校生です。学業を疎かにして、野球だけに打ち込むのは賛成しません。勉強と野球の練習を両立してほしいと部員に伝えています。

小菅 本校では「文武不岐」。「文」と「武」は分かれなとと考えています。勉強することがそのまま野球に対して真剣に向き合うことにつながり、野球で体力や技術力を養うことは、勉強にも生きるという考え方を実践しています。



市民の皆さんへメッセージ



持丸 AI (人工知能)が社会を便利にしていくといいますが、AIに真似できないのは人間の心です。心のある人間というのを、野球を通じてつかんでいただきたい。野球は人のために行います。ボールを投げられたら、そのボールを取る。今度は、相手に取りやすいボールを投げる。そういう心のキャッチボールができるような人間になってほしいです。

小菅 私は「育てる」ということではなくて、「育つ」というふうに思っています。答えは子どもの中にあるので、子どもが育つような環境づくりが大事だと思います。可能性にふたをせず、その子どもの可能性を伸ばしていく。

また、大人の関わり方が大事だと思います。監督同士で集まった時に、恩師である木内監督と、「今年はなぜ勝てた、なぜ負けた」という話をしていて、私が「子どもと波長が合わなかった」と答えたら「お前から合わせるんだよ!」と叱責されました。子どもの目線に合わせるというのが大事だと感じました。

中村 子育てはそういうところがあるかもしれませんがね。親は、上から目線ではなく、子どもを教育するために、子どもの目線に立っていかないといけない。教育を「共育」と考えて、大人と子どもが共に育っていく。

子どもたちを支えていくためにも、私たち大人がしっかりしなくてはならないと思います。



◆持丸修一監督

竜ヶ崎第一高等学校在学中、3年生の夏に甲子園に出場。

指導者としては、昭和50年に竜ヶ崎第一高等学校監督に就任し、夏に2年連続の甲子園出場。平成8年に藤代高等学校監督に就任し、同校初の甲子園出場に導く。15年から木内幸男氏の後任として、常総学院高等学校監督に就任し、春夏合わせて3度(春1回、夏2回)の甲子園出場を果たす。19年から専大松戸の監督に就任すると、27年に同校初の甲子園出場を遂げ、現在までに春夏合わせて5度(春2回、夏3回)甲子園に出場している。また、取手市教育委員として2期8年(平成19年～27年)務めた。



部員を指導する持丸監督

◆小菅勲監督

取手第二高等学校在学中、3年生の時に木内幸男氏が率いた夏の甲子園で優勝し、同年の国民体育大会(以下、「国体」)でも優勝。

指導者としては、平成5年に伊奈高等学校監督に就任。12年から下妻第二高等学校監督に就任すると2度(春1回、夏1回)甲子園に導く。28年から土浦日大の監督に就任し、3度夏の甲子園に出場している。令和5年夏の甲子園では同校初、茨城県勢として20年ぶりのベスト4進出を果たし、同年の国体でも優勝した。(日程の都合上、土浦日大と宮城県代表の仙台育英学園高等学校の2校が同時優勝)



部員を指導する小菅監督